

美濃の民俗

——岐阜県博物館民俗分野の研究課題——

今井 雅巳

Folkways in Mino Provinces —— Subjects of Research
in the Folklore Branch of Gifu Prefectural Museum

Masami IMAI

1. はじめに

岐阜県博物館は、1976年5月に置県百年記念事業の1つとして開館し、13年を経過した。自然と人文の両分野をあわせもつ総合博物館としての設定のなかで、民俗分野が明確な位置づけをもったのは、本年度からである。開館時の人文係は、考古・歴史・美術・工芸の4分野からなり、常設展示のなかに民俗としての展示はなかった。人文展示室1の近世・近代のなかの一部、および人文展示室2の信仰と芸能にかかわる部分に民俗関係の資料は展示された。しかしそれは、歴史の一部としてであり、美術工芸の一部とみなされての出発であった。準備室時代の1975年より民俗の専門家佐野正隆氏が着任したが、佐野氏は教育普及係の仕事が主で、民俗分野の専任学芸員としての任命ではなかった。

1982年に岐阜県美術館が開館し、当館の近代以降の美術分野がうつり、人文分野にのみ限っていえば美術博物館の性格から、歴史民俗博物館の性格へと変化しはじめた。

1987年秋には、旧徳山村民家（宮川家）が移築復元され、1988年春に、常設展示における人文展示室1の江戸時代の人々のくらし、近代百年のあゆみ、教育のうつりかわり、そして人文展示室2の信仰と芸能の展示が、民俗分野の展示として位置づけられることとなった。

こうした経緯を経て、岐阜県博物館の民俗分野はこれからどのような活動をし、展望をもてばよいのであろうか。本稿では、当館がたどってきた13年のあゆみをふりかえりつつ、現状と課題を浮きぼりにして、未来にむかっての活動の柱をたてる礎としたい。民俗分野の調査研究活動においては、「地をほうような、地をなめつくすようなフィールド・ワーク」こそが何よりも重要なことは言うまでもない。しかしながら、あえてこの報告をするのは、博物館の民俗分野の基本姿勢が今一つ鮮明でない現況にあっては、個々の調査・研究よりも先になされねばならない仕事であると考えからである。

2. 岐阜県博物館の基本的性格

民俗分野の活動の柱をたてる礎をさぐるため、博物館設立の原点にたちもどって考えてみたい。当館の概要書に、4つの柱が基本的性格として明記されている。

- ◎本県の人文、自然等に関する諸資料を収集、保管、展示、調査研究と、その活用をはかる総合博物館とする。
- ◎学校教育、社会教育との密接な連携をはかり、利用者が楽しく学習でき未来への探究心と創造性を開発させるような生涯教育機関とする。
- ◎県内の博物館および相当施設と連携をとり、資料の交換、提供を図り、本県の中央博物館としての役割をはたす内容と設備を有する施設とする。

◎資料の開発および保存活用について専門的な調査研究を推進する。

このような基本的性格をもって、学芸活動は『ふるさと志向』という大前提のもとでくり広げられることとなる。

「ふるさとは どのような歴史をたどってきたか

ふるさとは 現在どのような姿であるか

ふるさとは 将来どうあるべきか」

この『ふるさと志向』のもとで調査研究活動には、3つの領域が設定されている。

1. 資料に関する専門的領域
2. 資料の展示・保存に関する技術的領域
3. 「もの」と「ひと」とのかかわりに関する教育的領域

このレポートは、1～3のすべてにかかわりつつ、博物館の過去・現在をみつめ、未来をさぐるうとするものである。それではまず、13年の活動のあゆみをたどっておきたい。

3. 民俗分野にかかわる活動の歴史

(1) 調査研究と特別展

〈民俗分野にかかわる調査研究〉	〈民俗分野にかかわる特別展・資料紹介展〉
	(特別展) (資料紹介展)
	1976 ふるさとの文楽
	1978 能面と装束
岐阜県にのこる能・狂言面の調査	1980 よみがえる葉津文楽
葉津文楽の調査 飛騨南部の産育習俗	1981 美濃の絵馬 ワラと暮らし
美濃の大絵馬 ― 所在調査報告 ―	1982 高賀山の信仰
	1983 くらしと文化・あかり
民俗芸能 ― 西濃における作り物風流 ―	1985
信仰と民俗芸能 ― 長滝の延年 ―	1986 徳山の四季と暮らし
旧徳山村宮川家住宅について	" ふるさとの祭り 山の道具・焼畑
祭り ― 日吉山王祭りの比較(坂本と神戸)	1988 農具のうつりかわり
美濃の民俗 ― 研究課題 ―	1989 移ろいゆく年中行事 (予定)

特別展の傾向をみると、信仰と芸能にかかわるもの―5. 日常生活用具にかかわるもの―1. 年中行事にかかわるもの―1となる。資料紹介展に関しては、信仰と芸能にかかわるもの―1. 日常生活・生産用具にかかわるもの―4という結果になる。これからは、特別展においても、日常生活・生産にかかわる「もの」の展示を企画し、地についた生活の実態をほり下げて調査研究することも考えてみる必要があるだろう。また、祭りと年中行事のほかは、地域的には美濃に限られてい



写真1 特別展 能面と装束

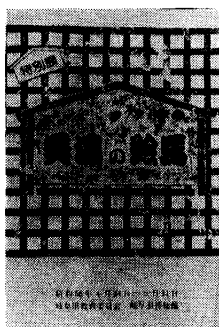


写真2 特別展 美濃の絵馬



写真3 特別展 ふるさとの祭り

る。岐阜県の博物館として、飛騨地域をも調査対象とした研究、特別展の企画が望まれる。

調査研究に関しては、報告書の刊行された年であり、実際には前年に調査がなされている。長期展望にたった調査研究の成果を発表する場として、民俗分野の活動のメインテーマを1日も早く設定したく思っている。また『旧徳山村宮川家住宅について』が館職員以外の寄稿論文で、他はすべて館職員の研究成果である。開かれた博物館をめざす時、民俗分野においても館外の研究者の論文が掲載されるような方向へと進んでゆくことが望まれる。

(2) 資料収集と整理保存

博物館の命は、あくことない資料の収集にあるとさえいわれる。この点について倉田公裕は『博物館の風景』のなかで次のように語っている。

「日本の博物館は収集はするが“あつめにあつめる”蒐集はしていないのではないかと皮肉つてもみたくなる。

欧米の博物館では、コレクションとして蒐集することを第一の役割としている。たとえば美術館の生命は購入であり、その存在理由であるとし、この義務を回避する美術館はギャラリーであっても美術館ではないとまでいう専門家もいるくらいである。

モノ（資料）を蒐めるには「気力、根気、金力、熱力」の四つの力が揃わないとなかなかにできるものではないと、徳富蘇峰はいう。確かに優れたコレクションを創るには、永い年月とあくことなき根気と、それを裏づける多額の資金がないとできるものではあるまい。だから、よい博物館を造って行くには、その当初の意志をうまく受け継いで発展させて行く決意がないと実現するものではないであろう。」

民俗分野の資料数約1,400点。そのすべてが、県民の皆様方からのご寄贈によるもので感謝にたえない。しかしながら、いただけるものは選り好みせずいただくという方針で、まとまったコレクションとはなっていない。専任の担当もいないままに、よくもこれだけ集められたと思う反面、民俗に限っては、当初の意志をはっきりさせる時であると考えられる。ふるさと岐阜の過去と現在とを正しく伝え、未来を予測させるような体系だった資料収集の方針を一刻も早くうちたてたい。

また、資料収集と同時に、整理保存が資料を生かすために欠くべからざることである。自然の資料分類が体系だてて、極めて整然となされているのに対し、民俗の資料分類は、各館のコレクションの性質により、マチマチといった面もみられる。これからの情報化社会において、資料の分類と名称の統一は必要不可欠のものとなろうが、この面における調査研究も推進しなければならないだろう。そして、一般来館者に気軽にご利用いただける資料目録の作成をこころがけたい。

(3) 資料紹介展

春、夏、秋の特別展のほかに、館蔵資料を中心とした資料紹介展を行ってきた。冬の来館者の少

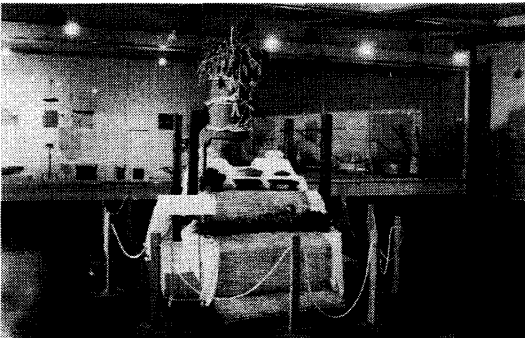


写真4 資料紹介展 山の道具・焼畑

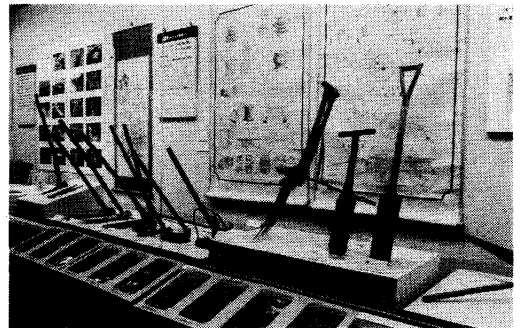


写真5 資料紹介展 農具のうつりかわり

ない時に何とか1人でもおいで願うことをめざした手づくり展示の資料紹介である。収蔵庫で日の目をみる時を待っている資料の紹介が主な目的であるため、テーマはおのずから限定されてくる。一つの流れ、ストーリーをもった展示は極めて困難なこととなってくる。資料整理と点検とを兼ねた、軽い展示への職員の意識変革も必要かと思われる。そして、ご寄贈いただいた資料は必ず一定の期間展示紹介することも大切であろう。

4. 他県の中央博物館・地域博物館における 民俗分野の活動

次に当館とよく似た性格をもつ他県の中央博物館や、理想とも思える活動をくり広げている地域博物館の様子を報告し、当館の今後の民俗分野における活動の方向づけの参考としたく考えたが、紙幅の関係上、調査協力をしていただいた館名のみ記させていただき、具体的な内容については、別の機会にゆずることとする。

埼玉県立博物館

埼玉県立さきたま資料館

大宮市立博物館

神奈川県立博物館

横須賀市博物館

平塚市博物館

栃木県立博物館

群馬県立歴史博物館

福島県立博物館

千葉県立中央博物館

沼津市立歴史民俗資料館

板橋区立郷土博物館

台東区立下町風俗資料館

神戸市立博物館

国立民族学博物館

国立歴史民俗博物館

東京国立博物館



写真6 栃木県立博物館の民俗展示



写真7 横須賀市博物館の民俗展示

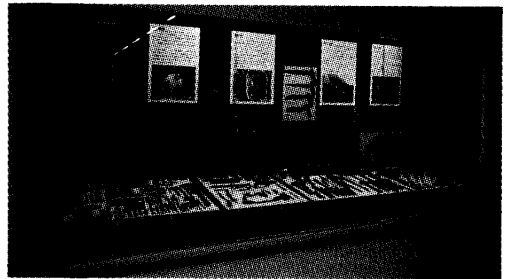


写真8 平塚市博物館の民俗展示



写真9 岐阜県の博物館

5. 岐阜県下の民俗資料と民俗資料館

岐阜県は民俗資料の豊庫といわれている。岐阜県博物館協会が1985年に編集した『岐阜県の博物館——美濃と飛騨の文化を訪ねて』（小野木三郎編）には、148館の博物館および相当・類似施設が掲載されている。そのなかで民俗資料を収集・保管・展示している館はおよそ90館にもものぼる。その後も、市町村立の歴史民俗資料館は続々とつくられており、現在では100館以上に民俗資料が収蔵されていると考えられる。しかし、専任の学芸員がおかれている館は少なく、管理人すら常駐しない無人の館さえ存在する。当然のことながら、収蔵された資料のデータは目録化されることもなく、死蔵につながりかねない。さらには民俗資料館などに収

蔵されず農家の納屋に、旧家の土蔵に、過疎の村に残され朽ちはてようとしている有形民俗文化財の調査と収集活動は、まだまだ手つかずの状態といえるかもしれない。また、無形の民俗文化財についても、祭りなどのハレの行事を除いては、正確な記録が残され保存に力を入れているとは言い難い状況である。

こうした民俗文化財の保存と調査のため、市町村単位の機関を統合する形での民俗文化財センターの設立を待ち望む声は大きい。考古学の資料収集・調査研究の機関として埋蔵文化財センターがつけられるのと同様に、民俗資料を多角的にとらえ、収集保存・調査研究がなされる機関ができると、民俗の豊庫岐阜県は、日本中から注目されることとなるだろう。

民俗文化の伝承者、研究者は県下に数多く生活し、活躍している。研究団体としては「美濃民俗」「飛騨民俗」「岐阜民俗」といった会が、それぞれに活動をくり広げている。岐阜大学、岐阜女子大学、東海女子大学、岐阜女子短期大学といった大学の研究者、サークル活動も活発である。またこうした研究者のほかに、市井に数多くの研究家、民俗伝承者がいる。しかしこうしたデータを一括して集め、個々の事象の研究から比較研究へと総合的な研究を可能とするような機関、施設はまだつくられていない。伝承により伝えられた貴重な文化財が、急激な社会の変化と目の利潤追求におわれて消えさろうとしている現況をなんとかくいとめたいものである。このような現状認識にたつて、岐阜県博物館の民俗分野がなすべきこと、成し得ることは何であるのかを探っていききたい。

6. 岐阜県博物館民俗分野の研究課題

岐阜県博物館は、中部地方においては唯一の総合博物館として華々しく開館し、13年の年齢をつみ重ねてきた。その後、多くの博物館が誕生したけれど、自然と人文が対等なスタッフと展示スペースを持つ総合博物館はできていない。この総合博物館としての性格が岐阜県博物館の特色であり、活動のベースと考えねばならない。新たに独立した民俗分野もこの総合という学際的な面から調査研究・資料収集、展示といった活動について考えをまとめた。

(1) 調査研究テーマの確立

過去の調査研究・特別展の流れをひもとくと、民俗分野に限らず、考古・歴史・美術工芸それぞれに独立した形でのテーマ設定がなされている。もちろん部分的な協力はあるけれど、自然係が行った「御岳山は生きている」「長良川」「笠ヶ岳」といった、動物・植物・地学3分野合同の形でのものはなかった。また、自然と人文とが総合博物館としての特性を生かした総合研究、特別展の企画も今までになかった。こうした経緯をふまえつつ、自然に最も近い人文の中の民俗として、調査研究のテーマを確立したい。

「岐阜は木の国、山の国」といわれて久しい。しかし、豊かな緑も人の手つかずの原生林はほとんどないとされている。言いかえれば、それだけ人の手かはいり込み、木とは長く深いつきあいもってきた。植物・動物・昆虫の担当者との共同研究が可能という点からも「木の民俗」を調査研究のメインテーマの1つとして設定できよう。同じ発想のもとで「山の民俗」、さらには長良川に代表される「川の民俗」、輪中を中心とした「平野・低湿地帯の民俗」などと発想がひろがってゆく。西濃・岐阜・中濃・北濃・東濃そして飛騨と大きく6つに分けられる県下の自然環境と行政区割の中で、人がどのように自然とかわり生活文化を築き上げていったのかを地区毎に調査研究する必要もあるだろう。

担当者の興味・関心のあるテーマを個人研究という形で深めると並行して、博物館全体のメインテーマ、人文係としてのテーマ、民俗担当としてのテーマを長く継続して研究を進めたい。このように考えるとき、とりあえずは「木の民俗」というテーマ設定のもと、枝・葉をのびし、根をしっかりとらせた研究活動にはいり、その成果を特別展、研究報告にまとめる形までもっていきたいと考える。

(2) 県の中央博物館としての使命

岐阜県の中央博物館としての使命を民俗分野としてどのように果たし得るのかということも、調査研究とならんで、大きな課題であるといえる。

200万県民のさまざまな期待にどのように応えていくのか。民俗分野に限らず、各分野、館全体として取り組まねばならないことであろう。民俗に関していえば、民俗研究者の交流の場となり、情報交換ができ、研究協力の対応・体制がとれることが望ましい。そして、個々の研究者に比較研究のできる場を提供することもまたその使命と考えられる。県下100余の民俗資料館のそれぞれに特色ある資料をピック・アップし、民俗資料の比較検討が可能な特別展の企画をも考えていきたい。各地の民俗資料館の存在をアピールするとともに、岐阜が民俗の豊庫であることを、実感できる企画にとりくみたいと思う。その上で、全国規模での民俗比較研究の窓口となれるようになるのが理想といえよう。

(3) 博物館から博情館へ

博物館はあくまで「モノ」によっての社会教育機関であり、生涯教育機関である。そして、苦痛のない学習の場として、未来への夢の玉手箱であらねばならない。国立民族学博物館の梅棹忠夫館長が提唱するように、これからの博物館は「モノ」をもつとともに、「モノ」のもつあらゆる情報を持ち、その提供者でなければならない。そうなった時に、全国規模での民俗比較研究が可能となり、当館の県中央博物館としての使命も果たせることとなる。博情館をめざしての人的ネットワークとともに、県下資料のデータ化について、共同研究をしてゆくことが夢のような課題である。

7. おわりに

1988年4月に、民俗担当となり右往左往しながら関東地方の博物館を中心に民俗分野の活動のあり方について、多くの先達からお教えいただいた。「なるほどこれが博物館だな」と感銘を受けた博物館には、すばらしい学芸員の存在があった。組織としての博物館が有効に機能するには、そこに働く人々の情熱と高い見識の融合のなかではじめて可能となる。

岐阜県博物館の特性が、自然と人文の総合性にあることもよく見えてきた。各分野の調査研究を更に深めつつ、他ではマネのできない総合研究を推し進めることの重要性を認識し、新参者の民俗分野にあっては他の分野に追いつき追いつくための資料調査の蓄積の大切さを痛感した。

今年度は、極めて概説的なあいまいな報告となってしまったが、来年度は「地をなめつくし、地をはいずり回るフィールド・ワーク」を実施し、具体的な研究成果としての「木の民俗」についての報告をまとめたい。その折に、多くのご教示賜った方々へは、改めて御礼申しあげることとして今回は筆をおきたい。